

# HABATAKI

はばたき

UNIVERSITY OF SHIZUOKA

52-1 Yada, Suruga-ku Shizuoka-shi Shizuoka-ken 422-8526 Japan

inside NEWS



## CONTENTS

2005USフォーラム	1	図書館だより	19
「身体論勉強会」への誘い	7	教員の人事	21
第60回日本栄養・食糧学会大会のご案内	8	日韓青少年 対話の広場	22
部局の動き	9	学校における日本語ボランティア活動	23
著書紹介	15	インターシップ通信	24
国際交流	16	クラブ・サークル紹介	25
研究助成採択	16	谷田風土記	27
受賞・採用・団体助成	17	開学記念行事のお知らせ	27

# 2005 U S フォーラム (第6回) を終えて

2005 U S フォーラム実行委員長 辻 邦郎

2005 U S (University of Shizuoka) フォーラムが3月2日(木)、3日(金)の二日間にわたり看護学部棟において開催されましたが、創立15周年記念事業の一環としてスタートした本フォーラムも、今回で第6回を迎えました。昨年までは「はごろもフーズ株」からのご寄附による後藤研究の成果発表が同時に行われ三日間の開催でしたが、後藤研究も昨年で終了しました事と、年度末のため時間的余裕がなかったため二日間の開催となりました。

第1日目は、文部科学省21世紀COEプログラムの成果発表(40題)と北川 勲先生の特別講演(薬食同源のサイエンス)



および交流会が行われました。COE研究については、何れも、世界に通用するトップレベルの研究が行われており、拠点アドバイザーの先生方(北川 勲・大阪大学名誉教授、長尾 拓・国立医薬品食品衛生研究所長、廣部 雅昭・静岡県学術教育政策顧問、家森 幸男・WHO循環器疾患予防国際共同研究センター長)からも過分とも云えるほどの高い評価を戴きました。COEに関与する先生方にとってポストCOEに向け、大きな励みとなったのではと思います。

夕刻からは学生ホールにおいて交流会を開催しました。交流会には本学の全部局および短大部の先生方、また、事務局職員、外部参加者の方々が大勢ご出席下さり、部局を越えた交流ができ、大きな成果があったと感じられました。本学が今後、一層の発展と充実を図るには、教職員の叡智と活力を集結し、一丸となっ



た大きな成果があったと感じられました。本学が今後、一層の発展と充実を図るには、教職員の叡智と活力を集結し、一丸となっ

て不断の努力をしてゆくことが重要と思いますが、交流会が相互理解の場として有意義であったと考えます。

第2日目は、学長特別研究(20題)および教員特別研究(117題)の成果発表が行われました。これらの特別研究の採択は外部の審査員の先生方にお頼みし決定されたもので、これらは、いわば本学で行われている研究の中でも選りすぐりのものと云えます。



本学は「県民の誇りとなる存在価値のある大学」となることを目指していますが、それには先ず、本学で行われている研究活動を広く地域社会に知って頂くことが必要です。その趣旨から、今回のフォーラムは県内企業、大学等に広くご案内させて頂きました。本フォーラムを契機に本学に対する認識が深まり、今後、共同研究等に発展することも期待されます。

研究発表に引き続き、慶応義塾大学大学院経営管理研究科の奥村昭博教授に「ナレッジと企業戦略」と題してご講演を頂きました。タイトルにあります「企業」を「大学」と置き換えて考えたとき、本学の進むべき方向に対し大きな示唆が提示され、2005 U S フォーラムを締め括るに相応しいものでした。二日間のフォーラムで発表された研究成果から分かりますように、本学は多くの貴重な財産を持っていることが再認識されました。こ



これらの財産が「宝の持ち腐れ」とならないよう、いかに運用して行くかが本学のこれからの課題でしょうか。

# 2005 USフォーラム

(静岡県立大学研究成果発表会)

日程 平成18年3月2日(木)～3日(金) 会場 静岡県立大学(看護学部棟4階 13411講義室)

## プログラム

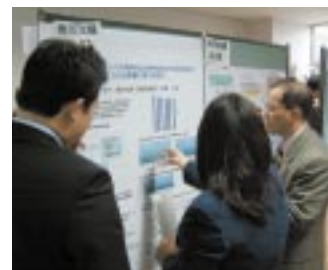
3月2日(木)「21世紀COEプログラム」成果発表

- ・学長あいさつ 9:30～9:40
- ・COE拠点リーダー報告、研究成果発表 9:40～16:30
- ・特別講演「薬食同源のサイエンス」16:30～17:30  
講師 大阪大学名誉教授 北川 勲
- ・交流会 17:30～19:00

3月3日(金)「学長特別研究・教員特別研究」成果発表

- ・学長あいさつ 9:00～9:05
- ・研究成果発表 9:05～17:00
- ・特別講演「ナレッジと企業戦略」17:00～18:00  
講師 慶応義塾大学大学院教授 奥村昭博

主催：静岡県立大学USフォーラム実行委員会



## 21世紀COEプログラム成果発表会が開催される

21世紀COEプログラム拠点リーダー 木苗 直秀

2005 US (University of Shizuoka) フォーラムは、平成18年3月2日(木)～3日(金)本学看護学部棟13411講義室で開催された。初日には、文部科学省で採択されている21世紀COEプログラム「先導的健康長寿学術推進拠点」の本年度成果発表会が行われた。当日は、拠点アドバイザーの北川勲先生(大阪大学名誉教授)、長尾拓先生(国立医薬品食品衛生研究所長)、廣部雅昭先生(静岡県学術教育政策顧問)、家森幸男先生(WHO循環器疾患予防国際共同研究センター長)が出席された。西垣克学長のあいさつに続き、拠点リーダーの木苗教授が、同プログラムの概要と進捗状況を報告し、次いで事業推進担当者20名が10分の持ち時間で、順次成果を口頭発表し、質疑応答がなされた。また、同事業の協力者16名とポストドク5名は、1分間で概略を説明したのち、ポスター発表を行った。それぞれの発表についてフロアーからの質問とともに、拠点アドバイザーによる総合的な感想・評価を頂いた。なお、各研究課題については、後日個々に評価を頂くことになっている。その後、北川勲先生には「薬食同源のサイエンス」と題し



て特別講演をして頂いた。医食同源、薬食同源の歴史とともに食物・薬物と生活習慣病に関して科学とエビデンスが重要であることを説かれた。その後、会場を学生ホールに移し、午後5時半から2時間余り、4人のアドバイザーとともに学内教員や大学院生、学外から参加された企業関係者、行政、試験研究機関の方々が立食パーティによる交流を行った。科学者の卵である修士や博士課程の学生にとっても実り多い一日を過ごすことができたと思う。



## 演題項目一覧(発表順)

・3月2日(木)

### <21世紀COEプログラム事業推進担当者>

発表No.	発表者	所属・職名	演題項目
1	山田 静雄	薬学研究科・教授	ノコギリヤシ果実抽出液の排尿障害改善作用と前立腺肥大症患者における摂取状況の調査
2	木苗 直秀	生活健康科学研究科・教授	アクリルアミドの遺伝毒性と生成条件に関する研究
3	奥 直人	薬学研究科・教授	がんの予防・診断・治療に関する総合的研究
4	出川 雅邦	薬学研究科・教授	高血圧治療薬ニカルジピンによる肝薬物代謝酵素およびトランスポーター遺伝子の発現誘導
5	今井 康之	薬学研究科・教授	ペロ毒素に対するIgA型モノクローナル抗体の特性解析と植物抗体作製のための基礎研究
6	野口 博司	薬学研究科・教授	植物ポリフェノール類の骨格合成酵素の機能改変
7	小林 裕和	生活健康科学研究科・教授	世界規模での食糧生産に寄与する植物環境ストレス耐性遺伝子の探索
8	伊勢村 護	生活健康科学研究科・教授	緑茶のin vivo遺伝子発現に対する影響の解析
9	鈴木 康夫	薬学研究科・教授	高病原性トリインフルエンザウイルスのヒト-ヒト間伝播可能変異機構 食肉用トリ腸管におけるウイルスレセプター解析
10	鈴木 隆	薬学研究科・助教授	パンデミックインフルエンザA型ウイルスに見出されたNA遺伝子の機能解析
11	大橋 典男	生活健康科学研究科・助教授	新興感染症病原体の分子細胞学的解析と生活習慣病の病態に関する研究
12	武田 厚司	薬学研究科・助教授	亜鉛による海馬グルタミン酸シグナルの調節
13	渡辺 達夫	生活健康科学研究科・助教授	食品中の低辛味TRPV1賦活成分
14	中山 勉	生活健康科学研究科・教授	NMRによるカテキン類の脂質膜中における動的解析
15	横越 英彦	生活健康科学研究科・教授	食品成分による精神および記憶・学習作用に関する栄養神経化学的研究
16	熊谷 裕通	生活健康科学研究科・助教授	血液透析患者における酸化ストレス軽減に関する研究
17	菅谷 純子	薬学研究科・助教授	生体順応に関わる薬物代謝酵素/薬物トランスポーター誘導(抑制)に効果をもつ食品成分の探索と評価法の研究
18	寺尾 良保	生活健康科学研究科・教授	環境汚染物質の生成・分解・代謝と毒性発現
19	加藤 大	薬学研究科・講師	チップを利用した迅速な代謝反応の解析法の構築
20	合田 敏尚	生活健康科学研究科・助教授	糖尿病の発症および進展を予測する新規バイオマ-カ-の網羅的探索とその応用/臨床応用領域研究プロジェクト「テイラーメイド個別対応型栄養/食品選択支援事業」の進展

### <21世紀COEプログラム研究協力者・ポスドク・・・口頭発表+ポスター発表>

発表No.	発表者	所属・職名	演題項目
21	五十里 彰	薬学研究科・講師	PKAによるパラセリン-1のリン酸化とマグネシウム輸送
22	佐塚 泰之	薬学研究科・講師	Doxorubicinの抗腫瘍作用に対するCurcuminの併用効果
23	吉成 浩一	薬学研究科・講師	高脂肪餌摂取に伴う肝CYP3Aレベルの低下について
24	阿部 郁朗	薬学研究科・講師	スクアレン代謝の医薬化学
25	川島 博人	薬学研究科・助教授	硫酸化糖鎖による末梢リンパ組織特異的リンパ球ホーミングおよび免疫応答の制御
26	小原 一男	薬学研究科・講師	血行力学刺激によるミオシン軽鎖多重リン酸化と細胞内シグナリング
27	古田 巧	薬学研究科・助手	カテキン類の新規骨格構築法の開発
28	熊澤 茂則	生活健康科学研究科・助教授	ベリー系果実中に含まれるアントシアニン成分の分析と抗酸化活性
29	丹羽 康夫	生活健康科学研究科・助手	カテキン生産増強のための安全なチャ形質転換ベクターの開発と形質転換条件の検討
30	増田 修一	生活健康科学研究科・助手	オリーブ葉エキス含有食品の糖尿病等の生活習慣病予防効果
31	下位 香代子	生活健康科学研究科・教授	メトキシフラボノイドのカテコールエストロゲン生成阻害作用
32	小林 公子	生活健康科学研究科・助教授	生活習慣病発症に及ぼす酸化ストレス関連遺伝子の個体差の影響
33	伊吹 裕子	生活健康科学研究科・助教授	紫外線照射による細胞死の阻害におけるPI3-kinase/Akt経路の関連性
34	坂口 真人	生活健康科学研究科・教授	環境因子が卵アルブミン分子鎖の運動性に与える効果に関するESRによる研究
35	橋本 伸哉	生活健康科学研究科・助教授	日本沿岸域における内分泌かく乱の原因となる化学物質に関する研究
36	清水 正則	生活健康科学研究科・COEポスドク	植物由来のアミノ酸合成酵素を選択マーカーにした葉緑体形質転換系の樹立
37	伊藤 友子	生活健康科学研究科・COEポスドク	高血糖モデルにおける好中球様分化誘導細胞の機能解析
38	小林 葉子	生活健康科学研究科・COEポスドク	神経機能制御に関する脳内アミノ酸の代謝及び輸送に関する研究
39	三井 隆弘	生活健康科学研究科・COEポスドク	血液生化学データに基づいた日本人における飲酒の適量について
40	カメナルスカゾルニツサ	生活健康科学研究科・COEポスドク	A Novel Vanadium-Dependent Bromoperoxidase In the Red Alga Kappaphycus alvarezii (Doty) Doty ex Silva, Which Indicates Clear Substrate Specificity

・3月3日(金)

<学長特別研究 - 特別推進研究>

発表No.	発表者	所属・職名	演題項目
1	武田 厚司	薬学部・助教授	抑制性GABA作動性神経の機能障害に着目した精神症状の解析
2	阿部 郁朗	薬学部・講師	生合成酵素の構造機能解析とスーパー改変酵素の創出
3	太田 敏郎	食品栄養科学部・助手	in vitroヒト血管モデルを使った血管新生シグナルの形態学的・生化学的解析
4	大橋 典男	環境科学研究所・助教授	新興感染症「アナプラズマ症」に関する分子疫学的解析
5	唐木 晋一郎	環境科学研究所・助手	ラット消化管における短鎖脂肪酸受容体GPR43の発現・分布
6	寺尾 良保	環境科学研究所・教授	環境中に放出されるステロイド系性ホルモンの塩素処理副生成物に関する研究
7	伊豆見 元	国際関係学部・教授	日韓関係と北朝鮮情勢
8	吉村 紀子	国際関係学部・教授	「アカデミックコミュニケーション能力の養成に役立つプレゼンテーション学習のすすめ」
9	武藤 伸明	経営情報学部・助教授	非工学系学部における新しい情報工学教育のあり方とカリキュラム・教材開発に関する研究
10	赤井 周司	薬学部・教授	加水分解酵素と金属触媒を組み合わせた新しい不斉合成プロセスの開発
11	山田 浩	薬学部・教授	電子的デバイスを用いた服薬コンプライアンス測定の信頼性と臨床応用への検討
12	市川 陽子	食品栄養科学部・助教授	事業所における個別栄養アセスメント手法を用いた新しい健康づくり事業の効果判定
13	熊谷 裕通	食品栄養科学部・助教授	静岡市清水地区の診療所における栄養指導支援事業
14	下位 香代子	環境科学研究所・教授	ビスフェノールAのカテコールエストロゲンのメチル化への影響
15	立田 洋司	国際関係学研究科・教授	フィールド・ワークによる調査資料写真のデジタル・アーカイブ化
16	森 勇治	経営情報学部・講師	導電性高分子の研究開発における国家プロジェクトの役割とその評価
17	奥野 ひろみ	看護学部・助教授	新任保健師の能力開発・スキルアップチェックリストの作成活用と研修から -
18	永井 洋子	健康支援センター・センター長	「自閉症・発達障害支援専門講座」の効果の評価に関する研究

<教員特別研究(学長権限分、学部長権限分)>

発表No.	発表者	所属・職名	演題項目
19	野口 博司	薬学部・教授	薬用植物由来女性ホルモン様作用生理活性天然物質の検索
20	出川 雅邦	薬学部・教授	芳香族アミン類による肝発癌とその動物性差について：肝異物代謝酵素誘導の観点から
21	豊岡 利正	薬学部・教授	医薬品や生体アミン等生体機能性分子の毛髪分析
22	小林 公子	食品栄養科学部・助教授	遺伝情報とその発現調節に基づく生命現象の解析
23	鈴木 裕一	食品栄養科学部・教授	健康長寿とミネラル
24	伊勢村 護	食品栄養科学部・教授	食品成分の機能性とその作用発現メカニズムに関する研究
25	熊澤 茂則	食品栄養科学部・助教授	食品機能の基盤的解析と機能性成分の開発
26	金澤 寛明	看護学部・教授	看護教育に即した解剖生理学のWEB版教育システムの作成
27	齊藤 麻子	看護学部・助手	小児専門病院と大学病院小児科における小児の療養環境に関する調査
28	中島 登美子	看護学部・教授	小児看護における遺伝看護のニーズ

<学長特別研究・教員特別研究(学長権限分)・・・ポスター発表>

発表No.	発表者	所属・職名	演題項目
29	勝矢 光昭	経営情報学部・教授	静岡県立大学の現状に関する数理科学的分析 ～独立法人化議論に資する客観的データ抽出～
30	中野 左知子	健康支援センター・カウンセラー	「静岡県立大学健康支援センター」の活動と今後の課題
31	一ノ瀬 祥一	食品栄養科学部・助教授	量子物性カシミア効果の高次元場の理論(力の統一理論)での発現
32	吉岡 寿	環境科学研究所・教授	緑茶抽出物とキトサンとの複合体の研究 緑茶を用いた新食材の開発
33	竹村 ひとみ	看護学部・助手	ホルモン依存性疾患と生活環境因子に関する基礎的研究
34	西田 公昭	看護学部・助教授	家族介護者の高齢者に対するコミュニケーション・スキル
35	松田 正巳	看護学部・教授	静岡県における総合的な健康福祉政策と人材育成に関するアクション・リサーチ
36	岡本 恵里	看護学部・助教授	がん看護に関わる看護者のベシエント・アドボカシーの実態とメンタルヘルスケアの必要性
37	木村 正人	看護学部・教授	ラット慢性腎不全モデルの腎障害進展におけるレニン・アンジオテンシン系と活性酸素の役割
38	東川 佐枝美	看護学部・講師	臨床実習指導者が学生に期待する看護場面体験と看護への気づき
39	塩川 和美	看護学部・助手	子育て支援における地域の役割 - F市内妊婦の意識調査と住民グループインタビューから -
40	八木 彌生	看護学部・教授	乳がん患者の相談サロンの効用と看護職による支援の可能性に関する研究 2
41	濱井 妙子	看護学部・助手	在日外国人の健康行動に関する研究
42	中島 登美子	看護学部・教授	カンガルーケアを実施した母親の早期産体験の癒しと愛着および抑うつとの関連
43	野村 千文	看護学部・講師	「高齢者生活機能アセスメントシート」活用による効果について
44	池田 和恵	看護学部・助手	臨床看護師の看護に対する技術観と倫理意識
45	奥田 都子	短期大学部・助教授	介護福祉士養成における居宅生活援助教育に関する研究

発表No.	発表者	所属・職名	演題項目
46	石野 育子	短期大学部・教授	介護保険施設における第三者評価尺度の開発
47	内藤 初枝	短期大学部・講師	「糖尿病食事療法」を活用した食事管理に関する研究
48	金城 やす子	短期大学部・講師	病児の生活・発達支援における保育士の専門性についての検討 H P Sの実態を参考として日本の医療保育士の教育を考える
49	三輪木 君子	短期大学部・助教授	臨床における「清拭」の実態と看護師の認識 教育内容との相違の要因を探る -
50	片川 智子	短期大学部・助手	小児看護における外来看護についての教育の現状 - 実態と教員の意識 -
51	鈴木 温子	短期大学部・講師	介護予防を見据えたこれからの歯科保健指導のあり方に関する研究
52	海老名 和子	短期大学部・講師	医療・福祉系学生と歯科学生および中高年者の生活習慣、歯科保健行動の実態調査
53	鈴木 温子	短期大学部・講師	歯科医療現場におけるリスクマネジメント・マニュアル作成についての一考察 リスクマネジメント教育を視野に入れて
54	田島 睦子	短期大学部・助教授	効果的な刷掃について
55	渡邊 薫	短期大学部・助手	介護技術教育における構成要素の因子分析的研究
56	三富 道子	短期大学部・助教授	介護福祉実習教育方法における実習プログラムの必要性に関して - 福祉教育からの学びから -
57	木林 身江子	短期大学部・助手	静岡市における通所介護の現状と課題
58	塚本 康子	短期大学部・教授	母性看護実習前後における学生のセルフエスティームと精神健康状態の変化について
59	六鹿 茂夫	国際関係学部研究科・教授	激動する黒海国際関係と日本の国益
60	星野 昌裕	国際関係学部・助教授	東アジア共同体創設における中国国内の遠心力ファクターとしての民族問題
61	水野 かほる	国際関係学部・助教授	年少者日本語教育の現状と学生ボランティア活動
62	津富 宏	国際関係学部・助教授	企業によるフリーター差別のあり方について
63	前山 亮吉	国際関係学部・助教授	日本政党政治と地域 - 静岡における戦後保守地盤の基礎的分析
64	大澤 隆幸	国際関係学部・教授	ラフカディオ・ハーンが見たドイツ人の研究
65	石川 准	国際関係学部・教授	LinuxスクリーンリーダーGR for UNIXの Mac OS X への移植の研究
66	小幡 壮	国際関係学部・教授	少数民族を焦点とする国際関係
67	塩坂 愛実	国際関係学部・学部3年	先進諸国における分権改革の推進 スペインの地方自治制度の分析を中心に
68	高木 桂蔵	国際関係学部・教授	静岡県の茶作業歌
69	湯瀬 裕昭	経営情報学部・助教授	大規模災害向けの災害時学生ボランティア情報システムの開発
70	山浦 一保	経営情報学部・講師	社会人の大学院進学を促進 - 抑制する要因に関する研究
71	岸 昭雄	経営情報学部・助手	労働者の生産能力の差異による異なる企業の成立およびその立地行動
72	福田 宏	経営情報学部・助教授	駿河湾・遠州灘の衛星画像の主成分分析と流動特性の研究
73	芹沢 幹雄	経営情報学部・教授	高齢化社会における生きがいとしてのスポーツに関する研究
74	大平 純彦	経営情報学部・助教授	静岡県景気動向指数の改定に関する研究

< 教員特別研究（学長権限分、学部長権限分） >

発表No.	発表者	所属・職名	演題項目
75	玉置 泰明	国際関係学部・教授	静岡県中山間地域における地域社会と「地域資源」についての人類学的研究
76	寺尾 康	国際関係学部・教授	大学生からの発信型英語力 - アカデミック・ライティングの実証的・理論的考察 -
77	渡邊 聡	国際関係学部・教授	日本の大衆文化への接触と日本に対する親近感 韓国大学生調査の結果から
78	澤田 敬人	国際関係学部・助教授	言説時空とフロンティアスタディーズ
79	小浜 裕久	国際関係学部・教授	WTO 10年の諸課題 < WTOと東アジア共同体構想の課題 >
80	岩崎 邦彦	経営情報学部・助教授	コンベンション都市のデスティネーション・マーケティング
81	五島 綾子 根本 佳恵 影山 敦彦	経営情報学部・教授 大学院経営情報学研究科・大学院生 大学院経営情報学研究科・大学院生	静岡県が導入した駿河湾深層水事業の S T S ( Science, Technology, and Society) 研究
82	末松 俊明	経営情報学部・助教授	協力ゲームについて
83	鈴木 直義	経営情報学部・教授	中間組織との連携によるプロジェクト指向の大学教育 - コンピュータシステム開発教育に関する事例報告
84	坂田 昌弘	環境科学研究所・教授	佐鳴湖底泥からの窒素・リン・COD溶出負荷の実態把握
85	牧野 正和	環境科学研究所・助教授	塩素化多環芳香族炭化水素の環境動態と生体影響能に関する研究
86	伊吹 裕子	環境科学研究所・助教授	Histone H2AXのリン酸化を指標とした光毒性物質の新規評価系の構築
87	桑原 厚和	環境科学研究所・教授	ラット遠位結腸運動に対するプロピオン酸の作用
88	橋本 伸哉	環境科学研究所・助教授	海洋由来の揮発性有機化合物の生成過程に関する研究
89	小野 孝彦	薬学部・教授	薬物の有害反応軽減のための新規作用機序薬の探索と新たな薬効の発現
90	渡邊 輝美	短期大学部・講師	保健師による生活習慣病の改善のための家庭訪問に関する研究
91	原田 茂治	短期大学部・教授	滴定カロリメトリーの高精度化と微少熱測定
92	古賀 震	短期大学部・教授	低酸素 - 再酸素化モデルによる血管内皮細胞障害、臓器障害の発症機序とその制御

< 教員特別研究 ( 学部長権限分 ) ・ ・ ・ ポスター発表 >

発表 No.	発表者	所属・職名	演題項目
93	板井 隆彦	食品栄養科学部・助教授	柿田川の調査地周辺の底生魚類群集におけるここ数年の変動
94	塩澤 竜志	環境科学研究所・助手	メイラド反応によって生成する新規変異原物質の研究
95	坂口 真人	環境科学研究所・教授	分子量・分子量分布が制御されたポリスチレン-b-ポリメチルアクリレートジブロック共重合体の合成とその創製された界面の特性について
96	横田 勇	環境科学研究所・教授	清掃工場の建築・環境デザインに関する研究
97	立岡 弓子	看護学部・助手	授乳期の情動ストレスの生理・生化学的指標による評価
98	佐藤 智子	看護学部・助手	学生によるホームページ作りを目指した課外グループ活動に関する取り組み
99	落合 富美江	看護学部・助教授	幼児期における踵骨骨梁面積率と睡眠状況との関連
100	松田 正巳	看護学部・教授	静岡県難病支援センターと県立大学看護学部及び短期大学部等の教育研究活動のあり方に関する研究
101	白石 葉子	看護学部・助手	移乗介助時に看護師にかかる負荷の検討
102	奥原 秀盛	看護学部・助教授	がん患者の家族を対象とするサポートグループにおける家族の語り
103	井下 裕子	看護学部・助手	人工股関節置換術患者の術後の日常生活状況に関する研究
104	濱井 妙子	看護学部・助手	看護動作における身体負荷に関する研究：移乗介助動作における運動学的分析
105	桑原 和代	看護学部・助手	看護師と子どもとの関わりにみられる「みたて」
106	斉本 美津子	看護学部・助手	妊婦における精神保健評価表の有効性に関する研究
107	河内 俊二	看護学部・助手	隔離拘束における看護者の判断を必要とする状況について
108	永野 ひろ子	短期大学部・講師	看護師の「共感的理解 自己評価」尺度の信頼性・妥当性の検討 - 臨床経験と共感的理解の構造 -
109	高林 ふみ代	短期大学部・助教授	型糖尿病発症マウス(NSY)の飼育過程における膵臓・肝臓の組織酸化の変化
110	那須 恵子	短期大学部・講師	竹炭浸漬液のヒトラ蝕誘発細菌への抗菌効果
111	吉田 直樹	短期大学部・助教授	線維芽細胞におけるTIMP-3及びTIMP-4の発現
112	漁田 俊子	短期大学部・教授	符号化反復における文脈の多様性が想起に及ぼす効果：反復間隔10分条件での検討
113	武藤 稲子	短期大学部・助手	在日外国人の医療保健行動に関する研究 - ブラジル人の健康行動 -
114	松平 千佳	短期大学部・講師	ドメスティック・バイオレンスを受けた女子学生に対するナラティブ・アプローチの効果について
115	伊藤 恵美	短期大学部・助手	社会福祉士国家試験受験対策講座実施取り組みについて
116	金子 智子	短期大学部・助教授	遺伝性多発奇形ウズラ ( HMM ) の形態異常
117	宮本 悟	短期大学部・助教授	フランス労働組合の社会保障運動 労働価値説の視点から
118	良知 雅美	短期大学部・助手	看護アセスメント指標としての睡眠：精神病急性期の睡眠パターンと回復過程の関係を検討する
119	藤原 愛子	短期大学部・教授	第二乳臼歯および第一大臼歯蝕経験歯数に影響する食物摂取習慣
120	福田 晴年	国際関係学部・教授	フランス知識人と現代：歴史と課題
121	児矢野 マリ	国際関係学部・助教授	現代国際法における「持続可能な開発」概念の意義と課題 - 国際環境法と国際経済法の観点からの分析 -
122	吉田 真樹	国際関係学部・講師	日本における「共生」の可能性 - 『平家物語』を中心に
123	西山 克典	国際関係学部・教授	帝政ロシアにおける「黄禍」論の展開
124	有泉 学宙	国際関係学部・教授	アメリカ合衆国におけるジェンダーと社会
125	嵯峨 隆	国際関係学部・教授	孫文のアジア主義と日本 「大アジア主義」講演との関連で
126	尾崎 亨	国際関係学部・教授	古代メソポタミアの粘土板楔形文字文書の刊行
127	平山 洋	国際関係学部・助手	福沢諭吉のアジア観と無署名論説
128	園田 明人	国際関係学部・教授	改良型時間測定法による心理学実験制御プログラムの開発
129	大楠 栄三	国際関係学部・助教授	作中人物の名指しの儀式化と書き出しにおける情景の出現：バルド＝パサンの初期小説において
130	宮崎 晋生	国際関係学部・講師	国際的企業提携に関する考察:1960～70年代の日本の汎用電算機業界にみる技術提携
131	余 項科	国際関係学部・助教授	「反日運動」の奥を探る
132	森田 克徳	経営情報学部・助教授	「延期 投機の原理」と「同期型在庫形成」 セブン イレブン・ジャパンの事例研究をとおして
133	渡部 和雄	経営情報学研究科・教授	社会人向け大学院教育における遠隔教育とサテライト教室での教育の試み
134	上野 雄史	経営情報学部・助手	退職給付会計基準適用に伴う企業行動の変化とその経済的な影響
135	ユンテーヨン	経営情報学部・助教授	スピンアウト起業家に関する研究 - ヤマハ社のスピンアウト起業家のケース -
136	小出 義夫	経営情報学部・教授	離散対称性とクォーク・レプトンの質量スペクトル
137	小島 茂	経営情報学部・教授	学歴汚染～日本を侵蝕するアメリカの学位ビジネス



# 「身体論勉強会」への誘い

看護学部 助教授 西村 ユミ



「われわれにとってあまりにも近い身体は、その近さのゆえに、かえってそのはたらいているありのままの姿でとられることがむづかしい」。こう述べたのは、哲学者の市川浩ですが、彼はさらに、日常生きているがままの状態では身体をとらえるなら、精神ということばで理解しているものに近いといいます。精神は身体であり、身体は精神でもある。一見、大胆とも思われるこの哲学者の発想はしかし、私たちの生きた身体の営みを根底から問い返そうとしているようにも思われます。

これまで医療の現場では、身体を対象化・物質化し、これを観察したり操作することに力を注ぎできました。つまり、病気になるのは物体としての身体であり、その部分を切り取ったり薬などによって変化させることで治療を進めてきたのです。しかし、実際に苦しみ喘いでいる患者を前にすると、私たちは、物としての他者の身体にというよりも、まずは苦悩する他者に会ってしまいます。この出会いは、私の精神が、物としての他者の身体を把握するというかたちで行われているわけではありません。確かに、精神と身体は二つの実体として区別されてきた歴史がありますが、私たちの実際の経験を振り返ってみると、この区別には幾ばくかの違和感を覚えてしまいます。この違和感を押し上げてくれた言葉が、市川の「精神としての身体」です。ここでの「身体」とは、単に物体としての身体を意味しているのではなく、私たちに経験されている「身体」であり、働いている「身体」であり、他者の存在によって成り立っている私の「身体」等々といった、生きているがままの「身体」のことをいいます。この「身体」

をもっと深く知りたい、というモチベーションが、成人看護学の領域の教員（佐藤登美教授、奥原秀盛助教授、西村ユミ）が中心となった「身体論勉強会」の開催へと到らせました。

第一回の勉強会は、平成15年9月に開催され、それから約2年半が経ちました。毎月、原則として第2土曜日に、看護学部の4階の一室において、関心と同じくする者同士が集まって議論を重ねています。参加者が手にしているのは、もちろん『精神としての身体』（市川浩、勁草書房、1975年）。このやや難解な哲学書を紐解きつつ、これに私たちの経験を付き合わせることを試みてきました。その作業は決してたやすいことではありません。この哲学書を丁寧に読み解くだけではなく、その内容を、その雰囲気、その文章に通底する何かを把握する作業を、自らの経験に照らし合わせながら丹念に行っていくのですから。しかし、難解だからといって放り出してしまうこともできません。その何かに触れることこそ、この勉強会の醍醐味なのです。そして、平成18年3月に、いよいよ一冊を読み終えるところまで漕ぎ着けました。

成人看護学領域の教員と大学院生からスタートしたこの勉強会も、回を重ねるごとに、いろいろな人が参加するようになりました。本学の研究科や学部の学生、卒業生、修了生はもちろんのこと、近隣の大学や短期大学の教員や学生、東京からはるばるやって来られる人もいます。総合病院の看護師、産業保健に携わっている保健師、県主催の看護教員養成コースの受講者、ケースワーカーなども参加しています。参加者が別の人を誘ってくることもあります。研究会のメンバーは固定されておらず、誰もがいつでも出入りでき、参加も自由。修士論文、卒業論文の提出時期、あるいは年度の変わり目になると参加者が減るのも、本勉強会の宿命なのかもしれません。まるで生き物のように膨らんだり、萎んだり、また膨らんだり…。多いときは30名を超えることもありますが、少ないときは10余名。

参加者がたとえやむを得ず休んでも、再び何かに導かれるように集まってくるのは、きっと身体論の思考法が、近代医学の渦中で窮屈な思いをし



ている私たち医療者の身体に、何らかの働きかけをしてくるためではないでしょうか。あるいは、身体論の思考法に触発された勉強会内での参加者の言葉に、相互に重層的触発が生じているからかもしれません。とりわけ、勉強会の代表者である佐藤登美先生の突飛なたとえ話などは、参加者を新鮮な気持ちにさせたり、忘れてしまっていた何かをぐっと手繰り寄せる手がかりを与えてくれます。「心身の合一は、『日常の生活と交わり』にお

いて、しかも感覚をゆるめ、精神を休養させることによって、もっともよく理解される」と市川も言っておりますが、私たちの精神と言ってもいい身体は、この勉強会において、知らずして普段の窮屈さから解放されて愉しんでいるのかもしれない。

そんな体験を一緒にしてみませんか。今後も、多くの皆さんの参加をお待ちしております。

## 第60回日本栄養・食糧学会大会のご案内

第60回日本栄養・食糧学会大会を、平成18年5月19日(金)～21日(日)までの間、静岡コンベンションアーツセンター及び静岡県立大学キャンパスにおいて開催する運びとなりました。伝統ある本学会の歴史の中で、静岡での開催ははじめてであり、鋭意準備を進めているところでございます。

日本栄養・食糧学会は、1947年の創立以来、毎年一回の本大会を開催し、国民の健康維持と増進を栄養と食糧の面から追求し、わが国におけるこの分野の研究・教育で中心的な役割を果たしてきました。

第60回大会では、全国の大学、研究所、企業等に所属する栄養学・食品学と生命科学分野の研究者の2,000名以上の参加が見込まれ、最新の研究成果発表と討論並びに情報の交換を行う予定です。これは、人類の健康や福祉に寄与するための研究成果の発信の場となります。また、本学会は産学官民、特に産業界と学会との接点の役割を果たしている栄養・食糧学分野の唯一の学会でもあります。

**日 時:**平成18年5月19日(金)～5月21日(日)

**会 場:**静岡県立大学キャンパス(静岡市駿河区谷田)、静岡コンベンションアーツセンター(グランシップ)

**プログラム:**特別講演

『食品アレルギーの誘導・抑制と腸管免疫特性』上野川修一先生(日本大学)

特別講演

『糖尿病:成因と病態の解明を目指して』清野 裕先生(関西電力病院)

特別講演

『脳が若返る「健脳科学」～食べ物との関係』高田明和先生(昭和女子大学)

市民講演、シンポジウム、一般講演(661題)、ランチョンセミナー(5題)

サテライトシンポジウム(3題)

**問い合わせ:**第60回日本栄養・食糧学会大会実行委員会事務局

〒422-8526 静岡市駿河区谷田5番1号

静岡県立大学 食品栄養科学部 栄養化学研究室

TEL:054-264-5911 FAX:054-263-7079

学会URL:<http://plaza.umin.ac.jp/eishoku/>

参加申込URL:<http://www.procom-i.co.jp/eishoku2006/>



## 環境科学研究所・大学院環境物質科学専攻の動き

環境科学研究所長 寺尾 良保  
環境物質科学専攻長 桑原 厚和

本年度の組織運営面での大きな動きは、平成17年4月、3研究室に新しい主任教員が着任したことです。反応化学研究室では、大石悦男教授が退官され後任に坂口真人教授が、水質・土壌環境研究室では相馬光之教授が退官され坂田昌弘教授が、光環境生命科学研究室では、五島廉輔教授が退官され伊吹裕子助教授が着任されました。各研究室とも活発な研究・教育活動を開始しました。また、平成17年4月1日から「地域環境啓発センター」が発足し、地域環境啓発に係わる事業で実績を上げつつあります。

研究面では、環境科学研究所年報2004年版発行：大学院環境物質科学専攻当初から年報を発行しており、これをご覧になれば、研究所の活動のあらましが分かります。研究所ホームページにも掲載されておりますのでご覧下さい。学会の開催：平成16年度の第13回日本環境化学討論会に引き続き、第42回日本水処理生物学会が平成17年11月23日(3日間)、静岡市のグランシップで開催されました。大会会長は岩堀恵祐教授で、実行委員として研究所教員も参画し、開催期間中300余名の参加者があり活発な討論が行われました。プロジェクト研究への参画：静岡県戦略課題研究プロジェクト「快適空間《佐鳴湖》の創造」に、当研究所の5研究室が参加して、佐鳴湖を浄化すべく研究しています。個々の教員がさまざまなプロジェクト研究に参加しておりますが、可能な限り所員全体が参加できるような大型プロジェクト研究も企画していますが、今後とも引き続き挑戦してゆきます。

教育面では、連携大学院の活用：平成17年度は、静岡県環境衛生科学研究所の研究者2名を客員教授及び助教授に推薦し、連携大学院制度の活用を図っています。専攻セミナー：環境物質科学専攻では、博士前期課程2年及び後期課程2年生を対象に、毎月1回、修士・博士論文研究の中間報告を行っております。当専攻の院生、教職員全員が参加し自由な討論が行われ、研究、教育両面における切磋琢磨の場となっております。今年度は教員の海外出張報告も加わり、院生にとって研究の視野を広げることに役立っております。環境科学研究に興味をもつ優秀な学生の確保：生活健康科学研究科では、16年度より、従来の選抜試験に加えて自己推薦入学を実施しました。自己推薦入学を有効に活用して、ペーパー試験のみでは得難い環境研究に興味を抱いている学生を入学させ、入学後個性を伸ばす教育を行い、環境に携わる有能な研究者や職業人を育てたいと思います。17年度は10名余の自己推薦入学希望者があり、今後とも広報等を充実させ優秀な学生を確保していきます。

社会貢献：環境科学分野は、研究・教育活動をとおりて快適で安全な生活環境の創造に寄与することが大きな使命であります。環境問題解決のためには、研究成果を社会に還元するとともに、一般県民の知識を深め理解と協力を得ることが大切です。当研究所では、地域環境啓発センターを中心に、社会貢献事業の一環としてさまざまな環境啓発活動を行っております。

環境科学研究所一般公開：平成17年8月20日、於静岡県立大学環境科学研究所 参加者：一般県民150名、環境問題、研究成果等の解説、モデル実験を行い、賑やかな土曜日でした。

夏休み親子環境教室：平成17年8月27日、於静岡県立大学環境科学研究所、参加者：50名、親子で環境問題を理解するための学習や実験を行いました。

しずおか環境・森林フェア（静岡県環境森林部）への出展：平成17年10月7日～9日、於ツインメッセ静岡、参加者：一般県民数千人



しずおか環境・森林フェア

環境研究交流しずおか集会「水環境保全の新たな視点」（静岡県立大学環境科学研究所 静岡県環境衛生科学研究所、静岡工業技術センター、日本水処理生物学会共催）：平成17年11月23日、於グランシップ、参加者：環境研究者及び一般県民150名、基調講演 いのちの水（相馬光之・静岡県立大学名誉教授） 話題提供 水道における微生物安全性の確保（平田強・麻布大学環境保健学部教授） 水域再生方策としての高度化技術の開発とこれからの展望（稲森悠平・（独）国立環境研究所・バイオエコエンジニアリング研究室長） 湖沼・海域の富栄養化管理における河川底生動物の有用性（安田郁子・富山県立大学短期大学部教授）総合討論会。

平成17年度環境科学講座「近未来の環境を考える」：於アイセル21、参加者：50名、11月2日「モノがコワレル」坂口真人教授、11月9日「汚れゆく水・不足する水」坂田昌弘教授、11月16日「ごみから地球環境まで」横田勇教授



環境科学講座

ネパール国カトマンズ盆地都市廃棄物管理計画調査（事業主体 ネパール国地方開発省及び独立行政法人国際協力機構（JICA）：2年間にわたってネパール国カトマンズ盆地の都市廃棄物管理に関する総合的な調査を日本の技術協力によって行いました。横田勇教授はJICA国内支援委員会委員長として、事前調査から、計画終了まで本調査に参加協力しました。

今後の課題：法人化並びに大学改革に向け、研究・教育環境を整備、活性化する。国内外諸研究機関や環境関連企業と積極的に共同研究を推進し、外部資金の導入や研究業績のさらなる向上を図る。環境科学に興味のある優秀な学生を確保するため、広報活動等の充実を図る。社会人教育（特に、環境関連研究機関に従事する研究者の博士後期課程における再教育等）に貢献する。フィールドワークを取り入れたカリキュラムを充実する。環境情報科学系分野の研究・教育を充実する。

# 附属図書館の動き

附属図書館長 中山 慶子

この1年の附属図書館の動向をみると、電子化、オンライン化が、本格化してきたことがわかります。

図書館の利用方法が、文献、データの形態の変化、すなわち電子化に伴い、オンライン利用が増加し、図書館を訪れての利用が減少してきています。この傾向は、今後さらに加速していくと思われます。

こうした傾向は、我々に図書館の存在理由、任務の再確認を迫っています。

これからの図書館は、電子化された文献、データの合理的利用法を、情報センターと協力のうえ整備し、役割分担を制度化していかなばなりません。

また、一方で、未電子化文献・電子化の困難な資料など、従来の図書館ならではの部分をみきわめて、重点化していく必要があります。

人間の連想思考、想像力など、非コンピュータ的な思考の連鎖には、図書館の開架式書庫が大きな働きをするといわれています。こうしたことについての意識的配置の検討も必要です。

また、よき学習空間としての充実、自習スペースの拡充もこれからの重点課題です。

以下に、最近の図書館の主要な動きを記述します。

1 電子ジャーナル、データベースの整備及び図書館システム整備による効果が顕れ、図書館の利用状況が変わっています。(「はばたき」第95号に平成16年度の利用状況統計を掲載して報告しましたので参照願います。)

- ・入館者数、図書貸出冊数及び文献コピー枚数が減少するなど、利用形態が変化しています。
- ・相互協力における学外への依頼件数が減少していますが、学外からの受付件数が増加しています。



1F閲覧室

2 試験期間中の開館時間を延長しました。

- ・開館時間を1時間延長して21時閉館を実施し、平常時の閉館時間20時時点での在館利用者は1日平均53人を数えました。

3 教員推薦図書「私の1冊の本」「100冊の本」制度を新たに設け、学生の読書推進に貢献しています。

- ・「私の1冊の本」：先生方の人生観を変えたような図書を紹介していただき、大学広報誌『はばたき』並びに図書館ホームページに掲載しています。
- ・「100冊の本」：先生方から学生の教養図書を推薦していただき、図書館2階自由閲覧室の推薦図書コーナーに配架しました。



推薦図書コーナー

4 学生相談関係図書コーナーを設置しました。

- ・学生が学生生活をおくる上で参考となる図書を、1階閲覧室にコーナーを設けて配架して利用に供しています。

5 附属図書館ホームページをリニューアルして、  
学術情報リンクページを充実しました。

6 化学系電子データベース「SciFinder」の利用提供を開始しました。

- ・学内のオンライン端末からのアクセスが、月に2千回以上を数えています。

7 学術情報検索講習会を開催し、図書館スタッフが講師になって、OPAC（蔵書）検索、ILL（相互利用）申込や電子DBの利用指導に努めています。

- ・2回（10日間）の講習会に延べ63人が参加しました。



学術情報検索室

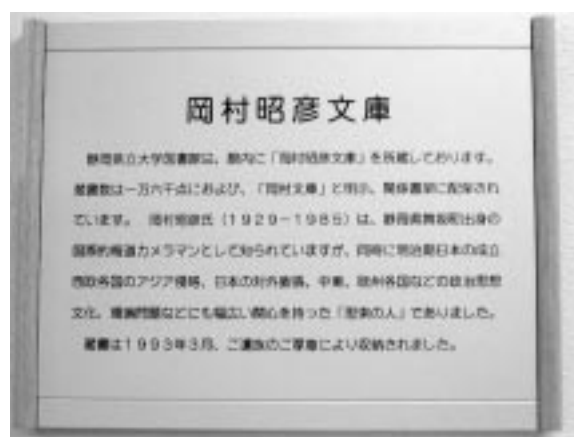
8 平成18年度日本薬学図書館協議会職員研修会が本学を会場として開催されます。

- ・8月に薬学系大学等の図書館及び資料室の職員が集います。

9 岡村（昭彦）文庫の文献資料が整備されます。

- ・ベトナム戦争カメラマンとして著名な岡村氏から譲り受けた図書（約1万6千冊）以外の岡村文庫の関係資料を活用して、国際関係学部等の教員がベトナム関係文書の解題データベース化等の研究に着手することになり、その成果が期待されます。

資料の整備後は、公開して利用に供する予定です。



岡村昭彦文庫

# 静岡県立大学短期大学の動き

短期大学部部长 田中丸 治宣

## 1 第二看護学科学生募集停止及び第一看護学科入学定員増

現在の短期大学部は、医療・保健・福祉の分野において、十分な専門知識と的確な技術を有し悩める人々に対して暖かい手を差し伸べることのできる豊かな人間性と幅広い教養を持った有為な人材を育成するとともに開かれた大学として優れた教育・研究の成果を地域に還元し社会の発展に寄与することを目的として運営されている。現在のかたちになったのは平成9年からで、第一看護学科、第二看護学科、歯科衛生学科及び社会福祉学科（社会福祉専攻、介護福祉専攻）からなっている。

このうち第二看護学科は、准看護師の資格者が入学対象であったが、静岡県内の高校において准看護師養成が行われなくなった（衛生看護学科等の廃止）ため、平成17年度から学生募集を停止した。これに伴い、平成16年度入学生が第二看護学科の最終入学生となり、平成17年度末をもって学科を廃止する予定であり、他方第一看護学科（従来定員60人）は平成17年度から入学定員を20人増加させ1学年80人の体制として、専門科目の授業を原則2クラス制にするなどの充実を図ってきた。

## 2 歯科衛生学科修業年限3年制移行

平成17年4月に歯科衛生士養成所指定規則（文部科学省・厚生労働省共同省令）の一部改正が行われ、修業年限が従来の「2年以上」から「3年以上」へと変更されたことから、歯科衛生学科を平成18年度から修業年限3年制に移行するこ

ととし、文部科学省の変更承認を平成17年12月に得た。

歯科医療においては、多様な疾患に罹患した高齢患者の増加や、継続的な指導管理による再発防止への対応など、歯科医療への患者ニーズの多様化を背景に歯科衛生士の資質向上が求められている。このような社会的要請に応えるためには、より高度な知識及び技術の習得や臨地臨床実習の充実が必要となる。当学科では、平成18年度入学生から3年制教育を導入し、教育内容の一層の充実をはかる。これに伴い、学科教員の増員（助教授1人、講師2人）及び実習設備等の拡充を行っている。

## 3 「短期大学士」の学位授与

学校教育法が一部改正され、短期大学の卒業者が従来の「準学士」と称することができる（称号）制度から、「短期大学士」の学位を授与する（学位）制度に改正された。これに伴い学則の関連部分を改正し、授与する学位に専攻分野の名称を、第一看護学科及び第二看護学科は看護学、歯科衛生学科は歯科衛生学、社会福祉学科（社会福祉専攻、介護福祉専攻）は社会福祉学としそれぞれに付記することとした。平成17年度（平成18年3月）卒業生から「短期大学士」の学位が授与される。

文部科学省によれば、「称号」は特定の学校を卒業したことについて本人が称することができるもので公に一定の価値・榮譽があるものであるが、国際的にはどのような知識・能力を持つか理解されがたいものであることから、学術の中心である大学が与えるものであり、一定水準の教育を受け、

知識・能力を持つと認められる者に与える「学位」とすることにより、授与される学位が国際的にも通用するものとなることである。また、学位であることを端的に示すために「学士」の文字を用いるとともに、短期大学卒業生であることを明確に示すために「短期大学」の文字を含むことが適切であるとして「短期大学士」の名称としたことである。

#### 4 在籍学生数等の状況

平成17年12月現在の在籍学生は、第一看護学科200人（1年生79人、2年生58人、3年生63人）、第二看護学科42人（1年生募集停止、2年生42人）、歯科衛生学科79人（1年生39人、2年生40人）、社会福祉学科社会福祉専攻102人（1年生49人、2年生53人）、介護福祉専攻100人（1年生49人、2年生51人）であり、総在籍数は523人である。

また、平成16年度は4学科で229人の卒業生を送り出した。207人の就職希望者はその専門性を高く評価され、96.6%が早々に就職した。就職者の約8割が静岡県内就職であった。なお、専門職としてさらに高度な知識や技術を求めて4年制大学への編入学等で進学したものが17人いた。

#### 5 「県民の日」関連イベントの新規開催

「県民の日」関連イベントとして、平成17年

8月19日に「オープンカレッジ」を開催した。各学科の教員が医療・保健・福祉における研究・教育・実践のノウハウを活かして、「こころと体のリフレッシュ」をテーマに、種々の相談（簡単な健康測定を含む生活習慣病の相談、歯についての相談、栄養相談、心理の立場からの子育て相談、介護相談）、介護食の調理実習、ピアノとバイオリンによる癒し系ミニコンサートなどを行ったところ、延べ80人の参加者があった。「調理実習にはまた参加したい。」「きれいで立派な学校で、今の学生がうらやましい。」「久しぶりのキャンパスでワクワクした。」など、来校した参加者には大変好評であり、中でも介護食の調理実習は特に好評で、この模様は当日民放テレビのニュースでも紹介された。このイベントは、地域貢献の一環として、次年度以降もさらに充実をはかりながら実施していく予定である。



県民の日イベント（癒し系ミニコンサート）



県民の日イベント（介護食の調理実習）



県民の日イベント（歯についての相談）

## 本学教員の著書紹介

### 『素敵なトウガラシ生活』

柏書房、全142頁、2005年12月24日刊行、定価1,365円

食品栄養科学部 助教授 渡辺 達夫

トウガラシには人を引きつける不思議な魅力があります。本書では、トウガラシの魅力を、食品成分としての立場から、一般の方向けにわかりやすく書いたものです。体脂肪を付きにくくするとか、汗をかく、体を温める、減塩に効く、等の体への影響と、意外と豊富に栄養素を含むこと、さまざまな調理法、Q & Aなどから構成されています。化学構造式を一切用いず、できるだけ平易な言葉での記述に努めました。本書が食生活を豊かにする一助になれば幸いです。



### 『国際環境法における事前協議制度 - 執行手段としての機能の展開 - 』

有信堂、全368頁、2006年2月20日刊行、定価6,930円

国際関係学部 助教授 児矢野マリ



近年の国際環境法では、環境影響評価（環境アセスメント）、事前通報や事前協議等、多くの条約が環境危険活動につきさまざまな事前手続を導入しつつある。本書は、伝統的に国家間の一般的な利害調整手段であった事前協議に焦点を当て、環境の分野におけるその機能の動態を解明し、現代国際法におけるこの手続の新たな展開を論証する。これは、国際環境法上の事前協議制度に関する世界初の包括的な実証研究である。また、法制度の執行につき、裁判所における司法過程の考察に偏りがちであった今までの国際法学に対して、「非対抗的・協調的な手法」等を含む行政的作用の観点から新たな理論構築の必要性を説く試みである。（なお、本書の刊行は日本学術振興会2005年度研究成果公開促進費（学術図書）の助成によった。）

### 『もうひとつの島国・スリランカ - 内戦に隠れた文化と暮らし』

ぶなのもり、全320頁、2006年1月25日刊行、定価2,310円

看護学部 教授 樋口まち子

インド洋の真珠とよばれ、海のシルクロードに位置するスリランカは古くから東西文化の交差点として重要な役割を担ってきた。そして、日本も宗教、文化、政治、経済など様々な分野でスリランカと深いつながりを持ってきた。本書は、国際協力及び研究活動を通して見えたスリランカの姿を、第1部は異文化社会で仕事をすることの難しさとおもしろさ、第2部では、市井の人々の日常生活に欠かすことのできない営みを、日本の原風景と相対化しながら描いている。さらに、スマトラ沖地震による津波被害からの民族・宗教を超えた復興の取り組みの現地調査の記録も収録し、地域社会のありようの原点に迫ろうとしている。





## 国際交流

### 国際交流協定大学2校から教員が来学

県立大学と学術交流協定を結んでいる中国の浙江大学及びロシアのモスクワ国立国際関係大学(MGIMO)から教員が来学されました。

浙江大学からは、同大学薬学院助教授の陳柳蓉(Chen LiuRong)先生が来学され、2月10日から3月25日まで滞在されました。同先生は、「日本の大学薬学部での漢方薬の研究及び生薬学教育の現状」をテーマに本学教員と共同研究をされました。



MGIMOからは、同大学国際関係学部日本語学科助教授のチローノフ・セルゲイ先生が来学され、2月10日から3月26日まで滞在されました。同先生は、「日本語の口語における擬態語・擬態表現の研究」をテーマに本学教員と共同研究をされました。



### 国際交流協定大学からの短期交換留学生在が帰国

県立大学と学術交流協定を結んでいるモスクワ国立国際関係大学(MGIMO)から短期交換留学生として、昨年12月に来学した同大学国際ジャーナリズム学部5年生のマカーロヴァ・エヴゲーニヤさんと同大学国際関係学部4年生のキレーエヴァ・ヴァレンチナさんの2名が平成18年2月までの3ヶ月間の留学期間を終え、2月28日、ロシアに帰国しました。

二人は、本学からほど近いお宅にホームステイをし、3ヶ月間、日本語や日本文化を勉強するとともに、静岡をはじめ、全国各地で日本の文化を実感し、貴重な体験と日本人々との交流をおみやげに帰国しました。

二人とも社会人となって、またぜひ日本を訪れてみたいということをお話されていました。



## 研究助成採択

#### 平成17年度 上原記念生命科学財団 研究助成

研究者：薬学部 薬品製造化学教室 教授 菅 敏幸

研究課題：光親和性プローブの簡便な合成法

#### 第23回(平成17年度)三共生命科学振興財団 研究助成

研究者：薬学部 生薬学教室 講師 阿部 郁朗

研究課題：コレステロール生合成酵素の精密機能解析と異常ステロイドの生成

#### 平成18年度 独立行政法人日本学術振興会 外国人特別研究員の受入れに係る科学研究費補助金

受入研究者：薬学部 生薬学教室 講師 阿部 郁朗

招聘研究者：中国科学アカデミー・蘭州化学物理研究所 王 波 Bo Wang, Ph.D.

招聘期間：2006年4月1日～2008年3月31日

研究課題：植物ポリケタイド合成酵素の生物有機化学的研究

#### 平成17年度 財団法人杉山報公会 研究助成金

研究者：食品栄養科学部 食品化学研究室 助教授 渡辺 達夫

研究課題：辛味をもつカプサイシン同族体の合成とカプサイシン受容体活性化能の測定

#### 平成17年度 日本看護協会出版会 研究助成金

研究代表者：看護学部 助手 河内俊二

共同研究者：看護学部 教授 鈴木啓子、看護学部 講師 石村佳代子

研究課題：精神科におけるマグネット式抑制帯の応用的技術の明確化に関する研究

#### 平成17年度 独立行政法人科学技術振興機構 戦略的国際科学技術協力推進事業

研究代表者：環境科学研究所 助教授 雨谷敬史

研究課題：有害化学物質の室内および個人曝露の国際比較とその低減対策

## 受賞・採用・団体助成



赤井 周司 教授

### 日本プロセス化学会2005 JSPC優秀賞を受賞

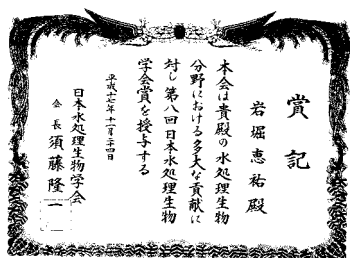
薬学部有機合成化学講座の赤井周司教授は、日本プロセス化学会2005 JSPC優秀賞を受賞しました。受賞対象の研究は「リパーゼ触媒ドミノ型不斉分子構築法：光学活性多置換イソキサゾリジン類の一段階合成」です。平成17年12月8日に開催された日本プロセス化学会2005 Winter Symposiumにて表彰式並びに受賞講演が行われました。



### 「宮田記念学術論文賞(Senji Miyata Foundation Award)」を受賞

この度、山口正義教授（大学院生活健康科学研究科）は第40回宮田記念学術論文賞(Senji Miyata Foundation Award)を受賞することになりました。この賞は、一薬剤師として、多年薬学、薬業に従事されてきた宮田専治氏が私財を投じて寄せられた寄付金によって設立された宮田専治学術振興会より授与されるものです。この宮田賞（通称名）は、薬科学または医療薬学の研究分野に関し、独創的な内容を有する優れた論文を日本薬学会の学術雑誌に発表したもの数編以上を含む研究が対象とされます。日本薬学会が平成17年度選考委員会で審査し、宮田専治学術振興会に推薦し、その理事会で決定されました。

受賞対象になった研究は、「食品由来生理活性因子の骨代謝調節機能とその骨粗鬆症の予防への展開」であります。この研究は、21世紀の高齢社会において多発され、社会的に大きな問題として関心がもたれている骨粗鬆症の予防と修復を目標にしたものであります。骨を溶かす細胞の働きを抑える治療薬はあっても、骨形成を促す薬はまだなく、これまでの研究で、大豆や納豆、温州ミカン、海藻のアカモク、ワサビ葉柄成分中に骨形成を促し、骨溶解を抑える因子が存在することを解明してきました。なお、受賞講演が日本薬学会第126年会（平成18年3月30日）において行なわれます。



### 第8回日本水処理生物学会賞を受賞

環境科学研究所の岩堀恵祐教授は、平成17年11月24日、日本水処理生物学会第42回大会において、水処理生物分野における多大な貢献に対し、第8回日本水処理生物学会賞を受賞しました。

### 日本水処理生物学会第42回大会における ベストプレゼンテーション賞を受賞

大学院環境物質科学専攻・博士後期課程2年次学生の黒黒大樹さんは、平成17年11月に開催された日本水処理生物学会第42回大会において、「多環芳香族炭化水素(PAH)分解菌のPAHの取り込みと分解特性」について発表を行い、ベストプレゼンテーション賞を受賞しました。



前列の右：岩堀恵祐教授、後列右から2番目：黒黒大樹さん

## 中川妙子さん「日本学術振興会特別研究員」に採用される

大学院生活健康科学研究科 食品栄養科学専攻 代謝調節学研究室の博士課程2年生の中川妙子（山口正義教授指導）さんは、平成18年度日本学術振興会特別研究員（DC2）に採用されました。受賞課題は、「レギュカルチン遺伝子導入腎近位尿細管細胞培養系における機能発現と細胞分子機構」です。これは、当研究室で発見、命名した蛋白質レギュカルチン（regucalcin）の細胞機能調節における役割の解明に関する研究です。なお、採択率は約10%で、大きな励みになっております。

## 日本腎臓学会・バクスター奨学金プログラムによるTravel Awardを受賞 国際学会にて参加発表

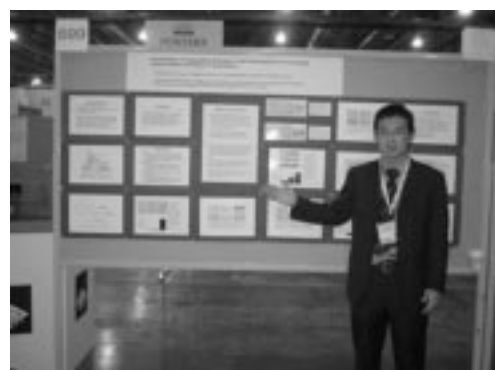
大学院薬学研究科 分子疾患学講座 修士課程1年 齊藤宏樹

平成17年度から始まった日本腎臓学会・バクスター奨学金プログラムによるTravel Awardを受賞して、小野教授のサポートのもと、Congress of American Society of Nephrology（米国腎臓学会総会、Philadelphia市開催、2005年11月8-13日）に参加、発表しました。

当初は演題が採用されたものの、旅費の面から参加を躊躇していたのですが、受賞の知らせに参加を決めました。Involvement of Coagulation Process in Rat Peritoneal Fibrosis through Tissue Factor and Factor Expression（ラット腹膜硬化症モデルにおける組織因子と第Ⅲ因子を介した凝固系の関与）という演題で、慢性腎不全の腹膜透析時の合併症である被嚢腹膜硬化症（EPS）の成因を凝固系の関与の面から明らかにしようとするものです。

当日は、本研究のポイントとなっているEPSモデルラットの腹膜において、凝固因子であるTissue FactorやFactorⅢのタンパクやmRNAの発現を説明し、質問者との質疑応答に参加することができました（写真はポスター発表の前で）。

今後も、この研究を進展させ、論文の執筆完成に努力したいと思います。



## 平成17年度（第3回）学生ボランティア団体支援の助成対象に採択

他者への「おもいやり」は社会生活の根本であり、学生のボランティア活動を社会参加の第一歩と位置づけ、自由な発想と行動力によって、社会貢献を計画・実行している学生の団体を対象に財団法人学生サポートセンターが助成を行う、「平成17年度（第3回）学生ボランティア団体支援」の助成対象として、防災ボランティアサークル「防'z」が採択されました。当該助成は、全国で30団体程度を対象としており、組織の活性化やネットワーク作りなどを経済的に支援し、併せて学生の自発的社会参加とリーダーシップの育成効果を目的としているものです。

# 図書館だより

## シリーズ 『私の1冊の本』

図書館では、利用者への読書推進の一環として、先生方が読んで、感動し心に残った本を紹介しています。

**金澤寛明 看護学部教授**

**紹介図書名：病者・花 細川宏遺稿詩集**

**著者名：細川宏（著）**

**小川鼎三, 中井準之助（編集）**

**出版社名：現代社**

**I S B N：4-87474-019-7**

**図書館所蔵：2階閲覧室 490.4/H94**

電話と言えば黒電話で、携帯電話はおろか留守番電話も無かった、今とは少し時の流れがゆっくりだった学生時代、アパートにはテレビも無かった。海に沈む夕陽を見ながら学友と人生とはなんだと語り合うのが日常だった（当然それは酒が入り加熱していくのだが、私自身あまり飲めないの、途中退散していたが）。

また夜、試験勉強をしていると、電話が鳴り、借りていたノートを返すとの言葉、気分転換になるかと待ち合わせ場所に行く、冬の新潟である、道の雪は凍てついている。ちょっとドライブしないかと車に乗せられ連れて行かれたのが、白鳥の湖「瓢湖（ひょうこ）」。真っ暗であるが、しばらくするとぼっと白く白鳥が浮いているのが見えて

くる。お互い無言の時間が20分ぐらい。寒いし帰ろうかとそれで帰宅する。

そういう青春？の時期を過ぎて、顕微鏡を覗くのが好きだった私が入り浸るようになった解剖教室の図書室（ここもまた、何かがあると宴会場になっていた）で、教授がある日読んでみたらと、貸してくれた本が今回紹介するものである。

「病人と健康な人を距てる城壁は高く 堀は深い・・・」

「病者・花 細川宏遺稿詩集」、44歳でがんで亡くなった東大神経解剖の教授が、闘病1年間につづった詩や日記を、師友によってまとめられたものである。

がんと闘いを、医学者と患者という二つの立場から見ている24頁にわたる「病者（ペイシェント）」、おそらく病室に届けられた花を見て読んだのであろう「花さまざま」、病室で思い浮かんだことや病気との闘いを詠った「胸の水」、最後の一月を綴った「最後の日記」の4部からなる。

詩でありますから、どのように読み取ろうとも、読んだ人が感じたものが全てで、この詩集から患者さんに接する医療従事者の心構えを学んで欲しいなどとは書きません。まず、何で解剖の教授が

私にこの詩集を貸したのか判らないですし、私自身が当時この詩集を読んで何を感じたのか、憶えていないのです。ただ、本を返してから自ら購入し、何度か読んでいます。さらに同級生に貸しています。それは今回、本棚から取り出した際に、感想が書かれた便箋、そしてどう考えても私のものではない葉がはさまっていたことから判ります。

がんばり屋の女剣士だった彼女とは講義ノートの貸し借りを入学当初から卒業までずっと続けていて、その間に読んでみたらと、この詩集を貸したようです。卒業後、私はすぐに解剖の大学院に入り、患者さんと接するというのをしないで今に至っている。実は、患者さんが死ぬのを目にするのが嫌だったから、基礎医学に進んだのかもしれないですね。そのように私が思い、基礎に進むように解剖の教授が考えて貸したのではないと思いますが。

では、感想もメモも残さなかった私とは違い、感想を書いたくれた彼女の方はあの当時この本を読んだことがどれだけ、記憶に残っているのか尋ねてみたいのだが、それはできない。もうこの世には居ないのだから。



岩堀恵祐 環境科学研究所教授

紹介図書名：やさしい日本の淡水プランクトン  
図解ハンドブック

著者名：一瀬諭・若林徹哉（監修）

滋賀の理科教材研究委員会（編集）

出版社名：合同出版株式会社

I S B N : 4-7726-0330-1

図書館所蔵：2階閲覧室 468.6/Sh 27

この十年間、小学生や中学生、高校生を対象に環境体験実習を行ってきた。「動く」「色が変わる」が子供たちの最大の関心事であるため、顕微鏡観察は体験実習には必須の内容である。専門書や図鑑の類は多数出版されているが、初心者が相手だと、どれも『帯に短し襷に長し』の感は否めず、子供たちに適した図鑑を探していた。そんな折、本書に出会った。

本書には、鮮明なカラー写真（635点）と判りやすいイラスト（347点）で、日本の淡水に出現する動植物プランクトンが紹介されている。また、子供たちや初心者にも理解できるように、できる限り平易な言葉が使われ、専門用語にはルビまで振られている。「動くか・動かないか」で区分していく子供たちのために、系統だった分類枠を越えて、形からグループ分けするという新しい試みを取り入れられている点も有り難い。さらに、採取・観察の仕方も図示され、眺めているだけで楽しく、親しみさえ感じられる図鑑である。現場で子供たちを指導していく実践の中から生まれた本書ならではの魅力を痛感している。

顕微鏡観察の座右の書として本書を推薦したい。

また、本書の普及版は極めて廉価であるので、高価で専門的な図鑑を1冊置くよりも、本書を必要な部署に必要な数だけ置かれることをお勧めする。小学生から専門家まで使える本書を契機に、あなたも水環境のプランクトンワールドに足を踏み入れてみませんか。

しかし、書かれている内容は結構、奥が深く、専門家の活用にも十分に耐えられるほどである。211属260種のプランクトンが紹介されているが、プランクトンの入門書で、これほど多くの種類を解説したものはお目にかかったことがない。原生動物を除けば、プランクトンについて『初心者以

上、専門家未満』の紹介者にも、湖沼の水質データを補完してくれる貴重な図鑑である。子供たちを指導される先生方も同じで、環境体験実習の参考になるはずである。



## 本学教員からの著書寄贈

先生方から著書を寄贈していただきました。(平成17年11月以降)  
図書館自由閲覧室の教員著作コーナーに配架して利用に供しています。

**伊勢村 護 教授 (食品栄養科学部)**

「茶の効能と応用開発」：本学教員他執筆 シーエムシー出版 2006年

**小浜 裕久 教授 (国際関係学部)**

「日本の国際貢献」 勁草書房 2005年

**津富 宏 助教授 (国際関係学部)**

「犯罪統計入門：犯罪を科学する方法」 日本評論社 2006年



## 教員の人事

### 就任

(平成18年1月1日付け)

八木 公生 国際関係学部長

### 採用

(平成18年2月1日付け)

松野 研司 大学院薬学研究科講師

山本 博之 薬学部助手

### 退職

(平成17年12月31日付け)

大石 真也 大学院薬学研究科講師

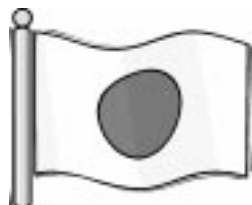
清水 基宏 大学院薬学研究科助手



## “ 日韓友情年2005 ”

### 未来への宣言 - 「日韓青少年対話の広場」に参加して

昨年(2004年)は1965年日韓国交正常化から40周年にあたり、「日韓友情年2005」というプロジェクトが両国の外務省を中心に立ち上げられました。シンポジウムや音楽祭など日韓関係を考えるためのイベントが多数開催されました。その一環で最後の企画として、両国(韓国)の高校生と大学生100名(両国50名ずつ)が参加する討論会がソウルで行われました。



討論者が事前に「LOOK KOREA (韓国に学ぶ)、LOOK JAPAN (日本に学ぶ)」をテーマに論文を書き、外務省や民間で構成される事務局がその中から選抜する仕組みでした。全国より寄せられた応募者多数の中から運良く国際関係学部学生が2名も採用され、昨年12月27日、両国の大学生や高校生たちと討論をしてきました。

以下にそのレポートを掲載します。

#### 齊藤広樹 (国際関係学部 小針ゼミ3年)

2005年は日韓両国にとって国交正常化40周年を迎えた記念すべき年でしたが、竹島問題・歴史教科書問題・靖国問題などにより、日韓関係は悪化の一途を辿ったと言われていました。そのため、私達が参加した論文発表会でも当然、そういった点だけの議論がなされ、厳しい雰囲気があるものと予測して望みました。

ところが、実際私達が目にした光景は全く違ったものでした。日韓双方の学生が自国の問題点を冷静に把握し、その上で日韓関係を改善するためにはどうすれば良いかを非常に高い意識をもって討論しました。

巷でとびかっている「反日」や「嫌韓」といったムードは微塵も感じられず、最後には学生同士が手を取り合い、今後の日韓関係をさらによいものにしていくため互いに努力することを誓いました。

今回の論文発表会のテーマでもあった「自国をみつめ他国に学ぶ」といった



姿勢こそ、日本と韓国に限らず他の2国間関係や国際関係においても必要なのではないかと考えます。



真摯な姿勢で日韓関係に望む人々が両国に存在する限り、政治・外交関係でどんな問題が生じようとも、日本と韓国は今後も友好的な関係を築いていくことができると私は確信しました。

#### 長友光一 (国際関係学部 小針ゼミ4年)

今回の日韓対話は本当に刺激になりました。特に、観光以外の目的で韓国を訪れたこと、日本全国の向学心が強い大学生と話す機会があったことが強い刺激でした。齊藤君が前述したように、日韓関係を考えるイベントそのものももちろん素晴らしいものでしたが、静岡という地にいる僕達にとって、他大学の学生と積極的に交流することは大切だと強く感じる機会になりました。

静岡県立大学は、静岡自体にもともと大学が少ないこともあって、複数の大学で構成するサークルもほとんどなく、東京や名古屋から離れていることもあって他大学の学生と知り合いになれる機会がありません。静岡という地の利は長所でもあります。損している面もあると常々思っていました。

今回のイベントで他の学生から面白く独創的な考えを聞いたり、こちらの意見をぶつけたりで、夜中部屋で話し込んだりしたりしたことは、有意義なことでした。「井の中の蛙」になってはいけません。

そのような意味からも、僕達は積極的に外部の学生と関っていくべきだと思います。今回の外務省が企画するイベント参加も、ゼミの先生の何気ない勧めからの論文の応募が当選した結果でした。

皆さんも、周りにあるチャンスにしり込みせずどんどん挑戦してみてください。はいかがでしょう。



# 学校における日本語ボランティア活動

国際関係学部 助教授 水野かほる

「フィリピンから日本語が全くできない子が来たんですが、授業中何も分からず座っているしかないのので何とかしてやりたいんです。県立大学の学生さんにボランティアで来てもらえませんか。」

私たちの活動は、昨年の4月半ば、静岡市内の某中学校教頭からの電話で始まりました。これをきっかけに本学の学生が静岡市内の小中学校に在籍する外国人の子どもたちの日本語支援を始めてから、はや10ヶ月になります。最初はたった一人の学習者のために3人の学生が支援に行きました。今では3校の小中学校の6人の児童生徒に10人の県大生が毎週通って日本語や教科の学習のお手伝いをしています。

静岡県は、愛知県、神奈川県に次いで3番目に日本語の支援が必要な子どもたちが多くいる県です(文部科学省「日本語指導が必要な外国人児童生徒の受入状況等に関する調査(平成16年度)」)。今は街を歩けば様々な言語が聞こえて来る多文化な状況が普通になっています。その中で、自分たちの意志にかかわらず日本にやってきた多数の子どもたちが暮らしています。そしてその多くが言葉の問題で様々な困難を抱えています。

このボランティアでは以下のようなことをやっています。

- ・ 学生は毎週子どもたちが在籍する学校に行き、原学級とは別の部屋で正規の時間帯に、一緒に日本語の勉強をしたり、美術の時間にクラスに入ってその子の隣に座って担当教員の指示を英語で伝えたりする。
- ・ 教科書を使っての勉強だけでなく、七夕や節分の行事を一緒に楽しんだり、漢字のトランプなどで遊びの要素を取り入れた学習をする。
- ・ 毎回の活動報告書を作成し、活動内容の伝達やどのように学習を進めたら良いかについて、メーリングリストやミーティングで話し合う。

参加する学生は、迷ったり戸惑ったりしながらも学習者と一緒に楽しく学習しまた一緒に成長しています。これが関わっている私たち教員(国際関係学部 水野・澤崎)の喜びでもあります。

この活動に参加している学生は次のような感想をよせています。

朝8時半。A中学校の校門をくぐり、彼女の待つ教室へ向かいます。「おはようございまーす。」にっこり笑う彼女は、今日も日本語を勉強する意欲にあふれています。「見て！わたし、漢字たくさん書きました！」得意顔でノートを見せてくれる彼女はとても愛らしいアメリカの女の子です。「日本語難しいねー。でもおもしろいねー。」頑張る彼女の姿は、この活動をやっててよかったという感動に変えてくれるのです。ただ単に教える、という一方的なティーチングではなく、相互に支えあいながらこの活動は成り立っていました。そして同じボランティア仲間と先生方のアドバイスもとても貴重なものです。この日本語支援活動には一人では感じる事の出来ない感動のドラマがたくさんありました。これからもっとこの活動が活発になりネットワークが広がっていくことを願っています。

(国際関係学部4年 松浦千草)

当初は不安もありましたが、多くの人に支えられ、半年間支援活動を行って行くことができました。かるた遊びで一緒にはしゃぎ、時には悩みごとじっくり耳を傾ける。そんな日本語支援の形もあるのではないかと思います。今では生徒さんとの関係も深まり、週に一度中学校を訪問することが楽しみのひとつになっています。

(国際関係学部3年 大滝育美)

今年度は、この活動に参加している学生を含め3人の学生が日本語教育能力検定試験に合格しました。日本語教育能力検定試験とは、日本語教員の資質・能力を判定する手段として1987年度から実施されているものです。

私たちはこれからもこの活動を継続してより一層充実させていきたいと思っています。本活動に関しては国際関係学部紀要『国際関係・比較文化研究』第4巻第2号に掲載予定です。詳しくはそちらを御覧になってください。



ミーティング風景



## 学生ネットワークDREAM SEEDSからのお知らせ

学生ネットワークとは、平成15年4月、“社会に適応する意欲と能力を培う”ということを目的に当時の国際関係学部の3年生が中心となり発足したもので、現在ではその通称を“DREAM SEEDS”と改め、国際関係学部だけではなく経営情報学部の学生も参加し、さらには、静岡県中部の各大学の学生とも協働して活動をしています。

また、企画の運営に当たっては、多くの静岡の企業・社会人の方々にご参加いただき、多くの刺激と支援を賜っています。

私達が1番に目指すものは幸せなキャリアの実現です！私たちは単なる就職支援サークルではなく、人としての成長や自己実現を応援するキャリア支援サークルなのです！！

### 学生ネットワークDREAM SEEDS主催

# インターンシップ通信！！

In 2006 予告編

今年もやってきました、私達“DREAM SEEDS”の主催するインターンシップ！！  
今年も例年通り、4月から説明会を行い、夏休みである8月、9月での実施を予定しております。

### インターンシップとは??

「働くってどういうこと?」「自分にはどういう仕事合っているんだろう?」  
こんな疑問を解決するために。実際に企業に体験入社させていただき、いろんな  
職業を自分で体験して“働く”ということについて考える機会とします

説明会の日時など、詳細が決まり次第お知らせいたしますので、それまで楽しみに

静岡県立大学学生ネットワーク“DREAM SEEDS”  
学生ネットワークHP：<http://fuji.u-shizuoka-ken.ac.jp/career/>

## coming soon!!

# クラブ・サークル紹介

## 吹奏楽部 シンフォニックウィンズ

国際関係学部 国際言語文化学科3年 宮村 さおり

私たちシンフォニックウィンズは、昨年の12月18日に、大講堂において、第17回の定期演奏会を開催しました。今回の定期演奏会では、初めての試みとなるOB・OG合同ステージを設け、多くの社会人の先輩方と共演しました。総勢60人でのステージは、企画や練習、連絡などにおいてもとても大変でしたが、先輩方のご協力、現役の部員たちの頑張りの甲斐あって、成功を収めることができました。この演奏会をもって、3年生は引退となりました。3年間部活を続けてきて、本番前など忙しくて大変なときもありましたが、よい仲間と楽しい思い出がたくさんできました。私もまた機会があれば、後輩たちと一緒に演奏したいと思います。寒い中、定期演奏会に足を運んでいただいた方々、またご協力いただいた諸先生方、関係者の皆様方に心より御礼申し上げます。



定期演奏会

現在私たちは、入学式と新入生歓迎会にむけて練習に励んでいます。毎週水曜日・金曜日の16時30分から土曜日の10時から、学生ホールで行っています。今後の主なイベントとしては、5月の芝生公園ふれあいコンサート、8月の吹奏楽コンクール、10月の剣祭、そして12月の定期演奏会があります。また、学校や先生方からの依頼により、学会などで演奏することもあります。クラシック、ポップス、演歌、童謡など、様々なジャンルの曲を演奏します。人前に立つ機会に恵まれているおかげで、演奏の技術が向上しているように思います。今年は、初めて卒業式でも演奏をしました。今後も活動の幅が広がってほしいと思います。

この部活の特徴は、部員の幅の広さにあるといえます。県立大学の生徒だけではなく、静岡県立大学短期大学部や静岡大学の学生、県大で事務員として働く方も練習に参加し、一緒に舞台に立ちます。また、来年の3月には、常葉大学、東海大学清水キャンパスの吹奏楽部との、三大学合同演奏会の開催を予定しているので、さらに多くの人との交流ができます。色々な人と一緒に演奏できるのは、大学生ならではの楽しみだと思います。

部員はいつでも募集しています。バイトや他のサークルとの掛け持ちも可能です。実際に学年の途中から入部したり、イベントの時にだけ賛助として演奏するという人もいます。勉強の息抜きとしても、音楽は最高だと思います。部員は、中学校・高校で吹奏楽をやっていたという人が多いのですが、楽器の経験がない人でも



剣祭にて

ちゃんと吹けるようになります。経験者、初心者は問いませんので、興味をもった方は気軽に練習を見学しに来てください。新1年生はもちろん、それ以外でも、たくさんの方が入部してくれることを期待しています。私たちと一緒に音楽を楽しみましょう！

最後になりましたが、これからも一回一回の舞台を大切に、私たちの演奏を聞いてくださるたくさんの方々楽しんでいただけるような演奏を目指して、頑張っていきたいと思います。シンフォニックウィンズへの応援、よろしくお願いします。

## 静岡学生NGO

国際関係学部 国際関係学科2年 勝見 舞子

わたしたち静岡学生NGOのメンバーは、「学生の手で何か国際協力をしたい」という目的で集まり、サークルを作りました。現在は1年生～3年生を合わせ、13名のメンバーで活動しております。メンバーには1年生が多く、皆が手探りで先の目的を達成するために動いています。メンバーのほとんどは国際関係学部生ですが、最近は看護学部からも活動の見学に来られる学生がありました。わたしたちは週に一度ミーティングを開き、週末に各人が参加してきたセミナーやイベントの報告をしたり、今後自分たちが取り組んでいきたい国際協力の方向を決めるために話し合いを行っております。



剣祭に向けて、そろいのTシャツを準備

昨年10月に起こったパキスタン地震の被災者を支援するために、わたしたちは剣祭をきっかけに1ヶ月間の募金活動を行いました。剣祭では各クラブ・サークルの皆様が募金箱の設置に協力いただき、2日間で16,461円を集めることができました。わたしたちはその後も学生ホール前などで募金活動を続け、大学構内では12,291円を皆様から募金していただきました。毎回メンバーが4名ほど学生ホールの入り口に立って、募金を呼びかけましたが、はじめはとても恥ずかしくて呼びかける声が震えたのをよく覚えております。そんな頼りない声からスタートした募金活動でしたが、日を重ねるごとに応援して下さる方が増えていきました。「少ないけど」と言いながら1コインずつ募金して下さった方、昼休みの終わりで次の授業に急いでいるところをわざわざ足を留めて募金して下さった方、わたしたちの活動を傍で見ていて財布からそっと千円札を出してくれた方など、いろいろな方がこの募金に協力して下さいました。その応援が自分たちの活動に対する自信につながっていったのだと思います。皆様から「がんばって」と声を掛けていただく度に、心から「ありがとうございます」という言葉が出てきました。今再び、その時と同じ気持ちで申し上げます。ご協力いただいた皆様、本当にありがとうございました。



パキスタン地震被災者支援募金活動

1ヶ月の活動の間には大学構内だけでなく、英和大学や青葉公園でも活動させていただきました。わたしたちにとってこの募金活動は、とても大きな経験でした。集まった募金の総額は115,424円と、わたしたちが目標としていた金額を大きく上回り、嬉しく思うと同時に自分たちがやっていることの責任の重さを感じました。学生の私たちが学外で活動する時、どうしたら一般の方に信頼してもらえるのかメンバー皆で頭を悩ませ、活動の度に改善できる点を見つけていきました。今後もこの点は大きな問題になると思いますが、今回の募金活動の経験を生かし、継続的な国際協力の形を探っていきたいと思います。

なお、皆様からいただいた募金は、日本赤十字社を通してパキスタン地震被災者のための支援にあてられましたことをここにご報告いたします。

谷田の戸塚家

県立大学のあたりを谷田というが、ここには古くからの名家がある。そのひとつが、『戸塚家』である。一帯に古くから定住した農家であるが、とくに十代『戸塚仲四郎』は、いまなお人々に語り継がれている。もともとは草薙村の堀場家の生まれで、谷田村の戸塚家に養子にいったのだが、水田が不足し、水に苦しむ様子を見て、水を引くことを考え、山ひとつ向こうの糺ヶ谷から、簡単な手堀り道具だけで六百五十間（一間は、1.8メートル）の用水を開通させたという。なかには隧道十六間もふくんでいる。天保年間のことである。いまも谷田に水田があるのは、このおかげと言われている。

『東海道往還図に残る戸塚家』

この家は代々続き、十二代戸塚仲四郎は明治期推されて村長になっている。この子孫も地域のために尽力している。例えば平沢寺が荒れたのを見て、わらじ履きで喜捨をあつめ、ついに現在あるお堂を再建した話もある。いまも平沢寺の『御堂』の横には『顕彰碑』が建っている。また郷土誌『有度風土記』編纂にも戸塚家は尽力している。いま地域のことが分かるのはこのためである。（後年

谷田風土記  
89

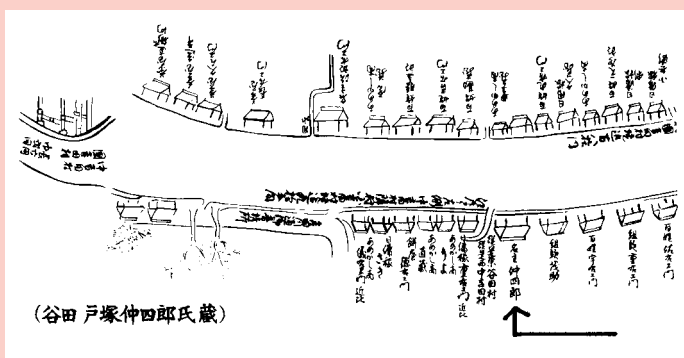
『ふるさと有度』として清水市に合併するとき再版されている。）

戸塚家は、谷田村と中吉田村の境に屋敷があり、東海道往還に面していた。当時の街道図を見ると、『名主戸塚仲四郎』と記されている。

なによりも特記したいのは、お茶の木を稲のように筋植えることを考え付き、普及させたことである。

これが静岡茶の発展に大きく寄与したのであった。戸塚家ご子孫はいまなお地域の人々に尊敬される名家としてご健在である。

(国際関係学部教授・高木桂蔵)



江戸期 東海道往還図(谷田付近)  
中央に名主仲四郎とある。

2006年開学記念行事開催のお知らせ

4月20日(木)は、本学の開学記念日です。記念行事を次のとおり行いますので、教職員、学生の皆さん、奮って御参加ください。

第1部 運動会～走って、投げて、引っぱって! パワー全開!!～

10:00 県大グラウンドに集合(雨天時 体育館)

第2部 石川県知事特別講演

16:30 大講堂

パネルディスカッション～県大について大いに語ろう!!～

「- 県大の過去・現在・未来 - 県大の果たしてきた役割と今後の課題」

17:00 大講堂

第3部 はばたきのつどい(交流会)～飲んで食べて語り合おう!!～

18:15 学生ホール

会費 教職員2,000円(前売り券を販売)

学 生 500円(当日会場で徴収)

(開学記念行事実行委員会)

学内ニュース「はばたき」への寄稿を大歓迎!

教職員・大学院生の皆様の受賞、研究助成への採択、学会・研究集会の案内、クラブ・サークル活動報告、ボランティア活動などの寄稿をお待ちしています。大歓迎します。

事務局経営課・企画スタッフ(管理棟2階)あてをお願いします。E-mail:kikaku3@u-shizuoka-ken.ac.jp

企画・編集: 静岡県立大学広報委員会(事務局 TEL 054-264-5103)

静岡県立大学ホームページアドレス: <http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp>